

## アクティブ・ラーニング時代と学力研

### 『はじめにアクティブ・ラーニングありき』ではなく

大阪みなみ学力研 図書 啓展（ずしよひろのぶ）

「アクティブ・ラーニングで謳われる「主体的な学び、対話的な学び、深い学び」が、すべての子どもにも実現されれば、すばらしいことです。

そのために今、「アクティブ・ラーニング」と冠したおびただしい数の書籍が出版され、講座、研修が数多くなされています。まさに教育界の大ブームです。

#### 「すべての子どもに」か

しかし、私はいくつかの疑問を持っています。

その一つは、ALは、数パーセントのエリートを育成することを目的としたものでないだろうか、ということですが。

文科省の打ち出す教育政策は、これまでがそうであったように、経済界の要請が土台にあり、人材育成論からの展開になる宿命があります。今回もそうです。

それに対して、私たちのめざすところは、

人格形成論からの展開です。すべての子どもにも確かな学力をつけ、豊かな人格形成につなげていくことが目標です。

その視点からだと、心配なことも出てきます。

例えば、「主体的な学び、対話的な学び」が「活動ありき」の授業のオンパレードになって、一部の子だけが活躍し、何を認識したのか、何を学んだのかよくわからない多くの子どもが続出しないだろうか、と。そうなれば、学力格差はますます広がってしまいます。

#### 「学力テスト体制」はどうする

もう一つは、学校が学力テスト体制や習熟度別学習体制にあることとの矛盾です。

大きな社会問題となったゆとり教育への批判やPISAショックの結果、全国学力テストと習熟度別学習が導入されました。

全国学力テストは、当初は文科省も「調

査により測定できるのは学力の特定の一部分であること」や、「序列化や過度な競争が生じないようにする」ことを明言していました。

ところが、今や、成果主義の導入で、学力テストが絶対視されて、競争がおおられ、どの都道府県も、また多くの学校も、学力テストの順位をあげるための対策に追われてきています。

過去の問題をひたすら繰り返して点数をあげようとする取り組みは、子どもたちから学習意欲を奪い、ストレスをもたらしています。

確かに習熟度別学習は問題点が噴出して、導入推進してきた教育委員会の幹部すら効果がないことを明言し、大いに見直すべき時がきました。

「アクティブ・ラーニング時代」と本気でいうなら、学力テスト体制と習熟度別学習の廃止をしてほしいものです。

#### 落ち研・学力研で学んで

私は、大学生のときにゼミで、

「低学力は政策的に作られている」

ということを学びました。その後、岸本裕史先生の名著「どの子も伸びる」や「見える学力、見えない学力」に出会い、感銘を受けました

岸本先生は述べています。

「生きる力としての基礎的な能力は大別して三つあります。

第一が基礎的な体力・運動能力です。  
(中略)

第二が、感応表現能力です。人のいうことがわかり、共に喜んだり悲しんだりできる力、他人に自分の思いを伝え、考えていることを的確に知らせる力です。(中略)

第三が基礎学力です。読み書き計算を基礎とした能力です。認識の発達の上で、なくてはならない能力です。(中略)世の中が見える力は、基礎学力を土台としてこそ、はじめてまっとうについてくるのです。今日、基礎学力の有無は、生きていく上で決定的な条件となっています。「見える学力、見えない学力」

私の教育実践の柱は、読み書き計算の学力

の基礎の正しい理解と徹底した習熟と見えない学力の充実で、低学力を克服することでした。

しかしながら、「落ち研」時代は授業論が弱かったと思います。私の中にもあります。そこに久保学力・授業論登場の必然性があります。

今は、学力の基礎づくりに加えて、豊かな一斉授業で、どの子にも分け隔てなく広範で均質な学力をつけていくことが公教育の役割だと考えています。

ですから、数パーセントのエリートづくりの教育や一部の子だけが活躍する教育には憤りを感じます。

「はじめにありき」ではなく

そうはいっても、ALとどうつきあっていかかは避けて通れない課題です。

第一は、豊かな一斉授業の中に、アクティブ・ラーニングをどう生かすかというところが考えられます。

小中学校の教師は、どんな教師も一時間中ずっと話し続けるのではなく、授業の流れの中で、子どものアクティブな学習を取

り入れることを考えると思います。

大事なことは、子どもの実態に応じて教育の目標や教育課程があり、単元ごとの計画があつて授業の展開が考えられ、最も有効と考えられる方法としてALが採用されることです。

しかし、よく見られるように、「はじめにALありき」が先行してしまうのは本末転倒ではないでしょうか。ALは一部であつて、実践全部ではないことは、誰もが賛同できることではないでしょうか。

第二は、学力の基礎づくりは、子どもの頭の中がアクティブになっているという点では、りっぱなアクティブ・ラーニングではないか、と見直すことです。音読、計算、漢字・・・子どもたちは集中して取り組んでいます。それも毎日の営みです。自分の伸びがわかり、自信をつけていきます。

本来学習は、「学んで賢くなり、うれしい」「みんなと学ぶことが楽しい」「もつと学びたい」など、理解と意欲が結びつくものであり、豊かな人格形成につながるものです。私たちはそんな学力づくり・授業づくりをめざしたいと思います。